2010年度　第 3 回特別講義　レポート

日時	2010 年 7 月 08 日（木）　13:30 – 16:00
会場	ホテル・ヘリテイジ　（オーロラホール）
テーマ	「アジャイル開発の方法論　～イテレーションの体験を通して～」
講師名・所属	鷲崎弘宣氏（早稲田大学）、堀田文明氏（デバック工学研究所）、足立久美氏（デンソー）
司会	演習コース II　ソフトウェアテスト演習コース分科会主査　堀田 第 6 科会　派生開発分科会主査　足立
アジェンダ	1.アジャイル開発の方法論（講義） 2. 新聞紙タワーの設計と構築（演習） （3.合宿を振り返って）

＜講義を通じて感じたこと、得たこと＞

1．アジャイル開発の方法論（講義）

アジャイル開発に携わる機会がなかったため、軽量開発手法という漠然としたイメージしか抱いていませんでしたが、今回の講義を通してその利点や具体的な開発手法について整理することが出来ました。プラクティスの中の「イテレーションへの作業不追加」は、実行タスクが固められた上で遵守できる要素なので、制御が一番難しい部分だと思います。その他のプラクティスについても、アジャイルに特化せず、他の開発手法や日々の業務の中でも意識すべきだと思いました。また、プラクティスの取捨選択・拡張や、それらを組合せて考え抜くことが必要とのことでしたが、最近の SQiP 定例の講義などでも言われている「考える力」の重要性を、再認識しました。

2．新聞紙タワーの設計と構築（演習）

新聞紙 5 枚とはさみ1つという資源を使用し、限られた時間の中でチームメンバーと一緒に知恵を絞りながらその高さをチーム間で競い合うという演習はとても楽しかったです。

演習中はタワーの作成に夢中になっていたため、講義前半の内容を意識せずに作業をしていましたが、演習終了後に講義資料を見直してみると、関連するプラクティスが良くわかります。イテレーションという短い期間の中でも、KPT（Keep, Problem, Try）法によってイテレーションを振り返り、強化すべきプラクティスを特定することによって、継続的に品質改善のプロセスを組み込んでいるという印象です。

当たり前のことですが、設計がある程度のレベルまで固まっていない状態で作業を進めると、次工程でモノを作る際にも別の方法を考えてしまい、結果として設計が固まらずにやり直すという

手戻りが生じることも改めて認識しました。また、設計の完成度にも依るのかもしれませんが、メンバー間の打ち解け度合いによっても、モノの品質に差が生じるのかもしれません。そういった意味では、短時間でメンバーと打ち解けられる雰囲気を作る演習にもなりました。

新聞紙タワーというシンプルな演習でしたが、イテレーションを通してチームワーク、コミュニケーション、設計、振り返りなどたくさんの要素を体験することができました。決められた時間内で作業をこなしてゆかなくてはならないという点では、手を動かす作業はもちろんのこと、短時間で思考を整理することについても考えさせられました。講義、演習と合わせて約 2 時間半でしたが、とても内容の濃い時間だったと思います。身近な材料で手軽に実践できるため、自社に持ち帰り、演習材料として使用したいと思います。

3. 合宿を振り返って

今年は2度目の合宿参加となりましたが、昨年同様、講義とともに分科会活動も充実しており、あっという間に時間が過ぎました。懇親会を通して分科会メンバーの皆さんとも打ち解けることができ、とても有意義で収穫の多い2日間でした。今後の例会、分科会を楽しみにしています。